

【原著】

母子保健活動における異文化体験を通して
看護実践能力向上がみられた保健師の特徴池田 絹代¹⁾、山崎 恭子²⁾、栗原 梨香²⁾、

1) 東邦大学健康科学部、2) 帝京大学大学院医療技術学研究科

要 旨

目的

近年、複雑化した健康・生活問題を抱える支援困難な事例が増加し、対応する人材の育成が求められている。支援困難事例を生む社会的背景の一つとして、在留外国人の増加が挙げているが、その 53.5%を 20～30 代が占めているため、全住民を支援対象とする行政機関の保健師は妊娠出産育児を通して外国人に関わる可能性が高いと考えられる。

一方、看護職の能力向上の必要性が問われ、特に住民のニーズが多様化している行政保健師に必要な能力については、「困難事例の対応」経験することにより最も多く獲得されていると言われている。

そこで本研究では、異文化体験による困難さを経験したことにより、母子保健活動全般において対応や姿勢に変化があり看護実践能力の向上がみられた保健師の特徴を個人的要因である保健師の背景と職場環境である所属機関の特徴、困難経験としての異文化体験の 3 点から明らかにする。

方法

首都圏(1 都 3 県)の保健センターなどで、母子保健事業経験のある保健師を対象に、保健師の背景、所属機関の特徴、困難経験としての異文化体験について尋ね、保健師の看護実践能力の向上である母子保健活動全般への対応や姿勢に変化があったか自記式質問紙調査を実施した。分析には、単純集計と χ^2 検定、フィッシャーの正確確率検定、Mann-Whitney の U 検定を行ったうえで、ロジスティック回帰分析を行った。

結果

外国人への母子保健活動を通して異文化による困難さを感じた保健師は 204 人で、うち看護実践能力の向上がみられた保健師は 66 人 (32.4%) であった。看護実践能力の向上がみられた保健師は、外国人に対して積極的な対応をしており、外国語の習得以外の何らかの個人対策を実施していた。所属機関としては、管轄人口が 10 万人以上で、外国人支援対策を実施していて、特に外国語版の母子保健事業一覧を作成していた。保健師活動上の困難経験(異文化体験)として、食事と子どものあやし方に異文化を感じていた。

そのうえで、向上に特に関連のあった要因は外国人対応への個人での対策の実施と所属機関に外国語版の母子保健事業一覧があることであった。

結論

異文化体験による困難さを通して、看護実践能力の向上がみられた保健師の特徴としては、外国人支

援に対して積極的な気持ちがあり、外国語の習得以外の何らかの努力を自ら行う行動力があり、所属機関としては、外国人支援の必要性を理解し、外国語版母子保健事業一覧など外国人支援ツールによって保健師活動を支えていることが分かった。

キーワード：保健師、看護実践能力の向上、在留外国人、母子保健活動